

# 「肝 障 害」

—アルコール・薬物障害例とその病像—

伊 藤 進 (千葉大学講師) 著

大阪市立大学教授

山 本 祐 夫

千葉大学第1内科教室からは三輪清三教授時代より、とくにアルコール性肝障害、薬物性肝障害について本邦における先駆的な業績が熱心に発表されていたが、その一連の臨床研究の中心的役割を果たしていた伊藤進博士が肝障害—アルコール・薬物障害例とその病像—と題した好著を上梓された。

本書の特徴は過去17年間に経験した約4,000例という豊富な肝生検例の中から、焦点をアルコール性肝障害、薬剤性肝障害に絞って代表的な症例を提示しながら病理レベルで得た情報を日常の臨床にどう生かすかを解説していることである。

教室および関連病院で長年集積し得た膨大な資料を整理し、自己の経験データーを示しながら、130枚の組織像をあげて具体的に説明している点、本邦におけるこの種の著書としてはきわめてユニークなものであり、時期を得た好書として広く臨床医家、および肝臓病研究者に一読をすすめたい。

## I アルコール性肝障害

アルコール性脂肪肝227例(6%)、アルコール性肝炎69例(うち肝硬変を伴ったもの12例)、アルコール性肝硬変140例など、自己の資料に基づいて、文献的考察も十分入れて、それぞれのアルコール性肝障害の病態の解説、臨床的意義、組織学的特徴点、診断、治療に及ぶ記述がなされ

ている。

さらに、アルコール性肝障害で常に問題になるアルコール硝子体は別項目としてくわしく論ぜられている。その由来、および光顕像、電顕像について述べ、アルコール性肝障害例の7%に検出し得たという。

また、アルコールの代謝と肝の項目では、生化学的な代謝面での諸問題を平易に解説している。ちなみに本邦におけるアルコール性肝障害のデータについては、かなり批判的な人達もいるが、私たちが大阪市愛隣地区(俗称釜ヶ崎)でしらべたアルコール性肝障害例の成績から考えると、本書で述べられている伊藤博士のデータ、主張を支持したい。

## II 薬物性肝障害

1961年~1971年の肝生検3,602例のうち薬物性肝障害はほぼ確実と診断された症例は137例(3.6%)であった。1教室として経験した薬物性肝障害例の肝生検例数としては恐らく本邦の1位であろうと思われる。

その起因薬剤は多岐にわたり、肝組織像、臨床検査所見と共に提示されている25症例の起因薬剤は、クロルプロマジン、抗うつ剤、抗てんかん剤、抗甲状腺剤、抗生物質(テトラサイクリン、エリスロマイシン、ノボピオシン)、抗結核剤、解熱鎮痛剤(パラセタモール、オプタリドン)、神経痛、リウマチ治療剤(ケトフェニルブタゾン、イブフェナッ

ク)、筋弛緩剤、動脈硬化用剤、向心臓神経剤、サルファ剤、蛋白同化ステロイド、ホルモン剤、プロパリン、クロロホルム、トロトラスト、DH剤、DH剤と類似構造をもつ薬物、農薬に及んでいる。

また、それぞれの薬剤による肝障害について、適切な解説と文献が付されている。

とくに詳細に述べられている症例については、臨床医家を裨益するところ大である。本書はこの薬物性肝障害編のみでも、優れた著書として推せんしたい。

## III 鑑別を要する疾患

この項目では主としてウイルス性慢性肝疾患と原発性胆汁性肝硬変について述べられている。いわゆるpersistent hepatitis 25例のうち悪化したものは慢性活動性肝炎へ移行した1例のみである。慢性肝炎活動性肝炎43例のうち19例が肝硬変に移行し、小葉改築型20例では、13例が肝硬変に移行したことを肝生検の追跡により証明している。

また、原発性胆汁性肝硬変の項では、抗ミトコンドリア抗体、抗平滑筋抗体、抗結核体等のいわゆる血中自己抗体に関する成績と、臨床的意義について解説している。

肝臓病研究の幅の広さが示されており、読みごたえがある。

最後に、本書を通読して、千葉大学第1内科の肝臓病臨床研究にかけ強い執念と、情熱がひしひしと感ぜられた。臨床データーを整理し、このようなユニークな著書としてまとめあげた伊藤進博士に敬意を表したい。

B5 頁304 図94 写真129

原色図5 ¥9,600 円280

医学書院刊